
サイハテの聖衣の日々（ミッション・レポートより）

ルシフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイハテの聖衣の日々（ミッション・レポートより）

【Nコード】

N7734W

【作者名】

ルシフェル

【あらすじ】

まさかの『電撃文庫MAGAZINE』のみ連載中
まだ文庫化していない作品、『サイハテの聖衣』！
大人気？連載中の作品をもっと広めようと『ミッション・レポート』
形式で書いた作品

新規読者にもわかるように登場人物とか書いたけど…完全に新規読者置いてきばりになってしまった作品……かも

それでも良い方は見てください！
てか新規作者ほど見てほしいんですけどね

「File#001」(前書き)

長編2作目です

果てさてこんな作品誰が見てくれるのやらwww

あと会話しかないのはわざとです

原作もこういう風に書かれていますからw

「File#001」

ミッション・レポート 「File#001 ？月某日 記録者ルシフェル」

ルシフェル「ということで始めました！ 『サイハテの聖衣^{シユラウド}』！
提供はルシフェルがお送りします。尚名前の表記は最初以降は都合上名前の一文字目を取ります」

羽々姫^{ハハキ}「いやいや、何自然に入って来てるんですか！？ あなた作者だし、この小説には絶対出てこない存在でしょ！」

沙々羅^{ササロ}「何だよ、別にいいだろ。作者が出たところで問題は無いし」

音々^{ネネ}「そうよ。そんなのでは社会の荒波を乗り越えていけないわよ」

羽「え！？ これ私以外は受けているの！？ そうだ、鳴々葉^{ナナハ}もこれでもいいの？」

鳴々葉「うん、もういいかなあって」

羽「ああ！ 鳴々葉が遠い目になってるわ……」

ル「まあとにかく受け入れろよ。ツツコミ担当」

羽「それは先輩達がボケまくるからですよ！ 私好きでやってるわけではないです！……まあいいわ。で、何で作者はここにいるの？」

ル「んゝ気分？」

羽「おんどりやあああ！！！！」

鳴「羽々姫ちゃん、落ち着いて……本当の理由って何なのですか？」

ル「いやまあね。サイハテナかなか文庫化しないじゃん。だから見たことのない人のための宣伝かな。あつ、ちなみに僕が出るのは今回だけで次回からは出ないから。原作は僕居ないからね。当たり前だけど」

沙「くつ、次回から寂しくなるなあ」

羽「いや、作者と私達って今日初めて会ったばかりでしょ。何で沙々羅先輩が同情してるんですか……」

音「でもありがたいわね。私達って『電撃文庫MAGAZINE（以下電M）』でしかあえないから知名度低いのよね」

ル「そうなんだよね。てかこれ『サイハテの聖衣』で載せてもそんなに見てくれないよね。むしろ二次だと嫌厭けんえんするんじゃないかな……そうだ！ オリジナルってことにして載せよう！」

羽「ダメですよ！ 先輩達も『それ名案』って感じで勝手にOKにしないでください」

沙「我が侂だな、羽々姫は。そんなことだから貧……いや何でもない」

羽「それで誤魔化せると思ってるのですか！？ 私だってまだまだこれからです！ あと先輩に我が俣って言われたくはないです！！」

鳴「あははは……でも本当にこの作品を見てくれる人はいるのでし
ょうか？」

ル「まあ一人この作品を知ってる人はいたから、一人は見てくれる
としてあとは……無理だろうねえ」

鳴「ええ！！ 一人しかいないんですか！？」

ル「いや実際には『電M』を買ってるのを知ってる人が一人しかい
ないってことなだけどね。まあ不本意ですが他の読者の皆様には
オリジナルとしてみただければ……」

音「でもそれだと私達がどんな人達かわからないと思うわ」

ル「そうだよねえ……じゃあこの作品を投稿した後にこの『サ
イハテの聖衣』の世界設定や人物の特徴などを書くか」

羽「そうですね。それだとまだわかりやすいですよね」

ル「よし、『Wikipedia』参照って書いてこよう」

羽「手抜きじゃないですか！ 自分で書く努力してください！」

ル「仕方ないなあ……鳴々葉ちゃんよろしくね」

鳴「それ私がやるのですか……羽々姫ちゃんよろしくお願いします」

羽「私だつて嫌よ……」

沙「じゃあ、あたしがやるよ」

音「私がやるわ」

ル「いやいやここは僕が」

鳴「あの私が……」

羽「ん……………じゃあ私が！」

ル・沙・音・鳴「どうぞ、どうぞ」

羽「やっぱりか！！ やっぱりこうなるのか！！ もうしょうもないことしないで作者が真面目に書いてくださいー！」

ル「わかった、わかった。仕方ないな。書くよ、書けばいいんだよ。全くこの子ったら我が侘なんだから」

羽「お母さん！？」

沙「ところで今日はメタ発言などの完全にふざけた日だが、次はどうするんだ？」

ル「あつ、ふざけてるって意識はあったんだ…… まあ次はさっきも言つたように僕は出ないから真面目に書くよ。次回は『電M』で書かれてた4〜9月のうちのどっかの月でやるよ」

音「まだまだやってたことあったものね」

鳴「そうですね。マガツヒが来ない日や非番の日とかはずっと暇でしたから」

羽「その分、基地でぐうたらしてただけの気がするんですが……」

ル「『業務日誌』なのにマガツヒの戦闘記録がないというね」

羽「いや本当は戦ってるのですよ。ただそのときが戦闘記録がないだけで……」

音「本当は文庫版が発売されるまでのつなぎ的な企画なものね」

羽「いやだから前にも言いましたがそういう生々しい裏事情は止めてくださいよっ！ 音々先輩だけでなく作者も同じようにこういうのはダメなんですからね！」

ル「あゝ大丈夫、大丈夫。僕が許可する！！」

羽「何の権限があつて！？」

ル「もちろん作者権だＺＥ」

羽「うざっ！」

ル「まあ、ということで第一回をやってきましたが……」

羽「え！？ まさかここで終わるの？」

ル「そうだよっと。えっと、今回はここまでのようです。これを知

っていた方は面白かったでしょうか？ 逆に知らなくても面白かった方はぜひとも『電撃文庫MAGAZINE』を買っていただければと思います。ではこれからもよろしくお願いします」

全員「お願いします！」

「File #001」（後書き）

読んでくださりありがとうございます

一話目ですが、次は登場人物などの紹介になります
でもこの形式で紹介しますけどねw

次はこの一時間後に投稿します

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしく願います

「File#002」

ミッション・レポート 「File#002 ？月某日 記録者ル
シフェル」

ルシフェル「ということで説明始めますね」

沙々羅「おう、がんばれよ」

鳴々葉「がんばってください！」

音々「がんばってね」

羽々姫「ってなんで私達までいるのよ！」

ル「まあ僕だけだと何か癪だったから全員連れてきたZ.E。まあ説明は僕がするから。ではプロローグから……」

新感覚・日常系戦場ファンタジー！！

獣装戦闘服《BDU》、またの名を“シュリウド聖衣”――

それは霊獣を封印した破魔の鎧。
マガツヒ怪物の侵攻から人々を守るため、少女たちは今日もシュリウド聖衣をまとう！

ル「カッコいいねえ。でもこの小説には怪物マガツヒとか出てこないかも」

羽「じゃあ何で書いたんですか!？」

ル「いやだつて電撃文庫MAGAZINEのプロローグにはそう書いてあったんだもん。ミッション・レポートになってから出てこないし」

沙「まあいいだろ。平和はいいことだろ?」

羽「いやそれは沙々羅先輩がサボりたいだけでは……」

ル「まあそれは良いとして次は概要……」

このお話は……

マガツヒと呼ばれる怪物の襲来によって人類が滅亡の危機に晒されている世界。

戦力の大半を失った政府自衛軍の代わりに本州最西端の赤間ヶ関あかまがせき要塞を守っているのは、民間軍事会社「極東自衛機構」の傭兵たちだった。

そんな辺境の基地に所属するのは獣装巫兵と呼ばれる四人の少女、超兵器「聖衣」シュニフウドをまとうことを許された彼女たちはマガツヒに唯一対抗できる力を持つ人類の希望らしいのだが……

ル「うん、こういうのは僕の小説には全くでてきてん!」

羽「いや、だからそんな威張られても……」

ル「まあさつきから言ってるけど『ミッション・レポート』になつてから出ないから出す道理がないんだよねえ。まあ出たら出る話作るかも」

鳴「次は何ですか?」

ル「次は……赤間ヶ関や怪物とか説明しても仕方ないしなあ……いやもうキャラ紹介で。ではまずは羽々姫よろしく!」

羽「結局私が説明するんですか……」

天乃あまの 羽々姫ははき

所属：極東自衛機構 西部方面支社 赤間ヶ関事業所第一巫兵部隊

出身地：埼玉県

階級：特任少尉

年齢：15歳

身長：154cm

特技：歌・ダンス

趣味：儉約・貯金

「借金まみれの元アイドル!」

民間軍事会社「極東自衛機構」に雇われた獣装巫兵。

かつては売れっ子のアイドルだったが、所属していた事務所が倒産。

という経歴を持つ少女。とある理由で莫大な借金を背負わされている。

元マネジャーの策謀で、借金返済のために傭兵として極東自衛機構で働くことになった悲運の少女。

真面目で欲張り屋だが、ものすごく貧乏でお金にうるさい。

アイドル時代のレッスンで培った体力が運動神経はかなりのもの。しかし真面目すぎる性格が災いして戦場で空回りすることも。

『作者のこの小説ではこれだけ覚えてればOKポイント』
ツッコミ役・金LOVE

羽「いやいや、ちょっと待てー！！最後はなんですか!？」

ル「ん？ 僕が考えたポイントですけど何か？」

羽「何かではないですよ！ ツッコミはまあいいとしても『金LOVE』ってなんですか！ 私守銭奴ではないですよ!」

ル「でも金銭感覚はかなりシビアでしょ？ 借金を背負ってるし」

羽「くっ、反論できない……」

音「お金がないのは羽々姫さんだけだものね。私たちは戦闘で稼いだ分で貯まっていけるもの」

羽「うう……借金さえなければ……」

ル「羽々姫が落ち込んだところで次は沙々羅さんで」

沙「おつ、私か」

桜狩^{さくらがし} 沙々羅^{ささろ}

所属：極東自衛機構 西部方面支社 赤間ヶ関事業所第一巫兵部隊

出身地：静岡県

階級：特任大尉

年齢：17歳

身長：164cm

特技：華道

趣味：昼寝・ゲーム

「伝説のEースは燃え尽き症候群!？」

12歳になる前から自衛軍の獣装巫兵として活躍していた大歴戦の英雄。

過去に400体以上のマガツヒを撃破した伝説的な超Eースである。

しかし私生活はすばらでだらしない、やる気がないのと大雑把なのが特徴の困った人。

三年前に突然軍を辞めて、なぜか極東自衛機構の傭兵となった。

本人は「燃え尽き症候群」を自称しており、すっかりやる気を失っているらしいのだが……

『作者のこの小説ではこれだけ覚えてればOKポイント』
ダメ人間・いじり役

沙「まっ、妥当だな」

羽「実際ダメ人間ですからね……なんでこんな人が英雄扱いなんだろう……」

ル「昔がんばってたからだろうね。今では面影がないけど。じゃあ次は鳴々葉ちゃんです」

鳴「はい、わかりました」

とがのみや
樗宮 ななは
鳴々葉

所属：極東自衛機構 西部方面支社 赤間ヶ関事業所第一巫兵部隊
出身地：三重県
階級：特任少尉
年齢：15歳
身長：156cm
特技：盗聴・ハッキング
趣味：料理

「涙目がよく似合う薄幸のエリート忍者」

責任感が強く生真面目な少女。父親は政府の諜報員。母方の実家は「忍者」の家系で、幼いころから過酷な訓練を受けているため、身体能力は非常に高い。

しかし気弱でメンタル面が脆く、要領が悪い不憫な性格である。
小揺木 音々と分隊を組むことが多く、彼女の言葉に毎日振り回される被害者でもある。

『作者のこの小説ではこれだけ覚えてればOKポイント』
不憫で可哀想な子・過去のトラウマ掘り返すな、絶対！

ル・羽「あれは本当にやばかった……」

鳴「うう、仕方ないじゃないですかあ……でもあのときの記憶は薄いんですよ……」

ル「ああいう暴走したときって覚えてないんだろうな。じゃあ最後は音々さんで」

音「了解」

小揺木 こゆゑき 音々 ねね

所属：極東自衛機構 西部方面支社 赤間ヶ関事業所第一巫兵部隊
出身地：神奈川県出身。

階級：特任大尉

年齢：16歳

身長：158cm

特技：薬剤調合

趣味：読書・食べ歩き

「天然系お嬢様は薬物マニア」

鎌倉の裕福な素封家の娘で、おっとりした物腰の天然系お嬢様。
第一巫兵部隊の最古参で、桜狩 沙々羅の親友。

意外に計算高い一面があり、こっそり策謀を巡らすのが趣味である。甘いものが好きなのは頭脳派の証。

美人でスタイル抜群。ただし病弱。常に怪しい薬を服用しており、自ら薬物の調合も行う。

『作者のこの小説ではこれだけ覚えてればOKポイント』
言動と行動がよくわからない・この人の薬のだけはお世話にはなりたくない

ル「前半は完全に自分だけですな」

音「あら、そうかしら？」

ル「うん、ぶっちゃけ何考えてるんだろって時々思う。まあ僕だけだと思っけどね」

羽「でも後半は正解よね……あれはひどい目にあっただわ……」

ル「たぶんあの時は人生最大のピンチだっただろうね。まさに九死に一生を得る感じだったよ」

羽「そうでしょうね……」

ル「さて全部書き終わったかな？」

沙「そうなのか？ 怪物とかは……さっき言っても仕方ないとか言っていたな」

ル「うん。だから今回はこれで終了。いやゝ長かったゝ」

羽「でもほとんど結局は自分達が説明してましたし……」

鳴「余計なことも書かれた気がします……」

ル「それでもしんどかったの。あと余計なことじゃないから！ あれ真面目に書いたから！」

羽「本当ですか……全く」

ル「ということでは今回もこれで終了！ 次回からはこの4人での話をお届けします！ 次も見てくださいね。ではこれからもよろしくお願いします！」

全員「お願いします！」

「File #002」（後書き）

読んでくださりありがとうございます

二話目です

うん、これ書くの圧倒的に楽w

他と比べてほとんど考えないでもいいもんwww

まあ次回からは考えないといけないでしょうけどねw

次回はたぶん2ヶ月ペースで更新します

たぶん：奇数月の10日に更新かなw

つまり『電撃文庫MAGAZINE』の出ないつきですねw

では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしく願います

「File#003」

ミッション・レポート 「File#003 4月某日 記録者

天乃 羽々姫」

羽々姫「どうも、羽々姫です。今日はお花見に来ています」

沙々羅「誰に書いているんだ？」

羽「業務日誌ですよ！ いつも書いているじゃないですか」

音「あら、まめね」

羽「まめって……これ一応仕事ですからね！ 私や鳴々葉が書いている時と先輩達がいる時に割合一見同じに見えますが実際書いているのは私達の方が多いですからね！ 私達ばかり書かされてばかりいるんですから」

音「そんなことないわよ。ね、沙々羅？」

沙「そうだぞ。実際『電撃文庫MAGAZINE』でも同じ割合で掲載されているだろ」

羽「くっ、実際私達が苦労しているのに証拠がない……」

鳴々葉「どんまい、羽々姫ちゃん……」

沙「まっ、気にすんなって。せつかくのお花見なんだしパーッとや

ろっぜ」

羽「いや言ったのは沙々羅先輩では……でもそうですね。今日からいはくつろぎますか」

鳴「それにしてもここ綺麗ですね」

音「そうね。ここは私と沙々羅とのおき場所だからね」

鳴「そうなんですか？」

沙「ああ。あたしが仕事さぼってる時にたまたま見つけたんだがな」

羽「理由はあれですが本当によく見つけましたね。特等席ですよ」

沙「まあクマやイノシシが出るのがたまに傷だがな」

鳴「ええ！？」

羽「いやそれ結構大変ですよね！？ 私達“聖衣”持ってきてませんよ！」

沙「まあ大丈夫だろ。なつ、鳴々葉」

鳴「なんで私なんですかあ」

音「だって『忍者』の家系なんでしょ？ ならクマくらい倒せるでしょ？」

鳴「素手じゃいくらなんでも無理ですよあ」

沙「仕方ないなあ。もし出てきたら……」

羽「出てきたら？」

沙「逃げる！」

羽「それ全然解決してませんよね。本当大丈夫なんですか……」

沙「それより食おうぜ。もう花見るのも飽きたしな」

羽「そうですね。飽きたっていうのはどうかと思いますけど、確かお腹も好きでしたし」

音「ではそれぞれ作ってきたお弁当開けましょう」

鳴「では私から行きますね」

沙「鳴々葉って料理が得意だったよな」

鳴「得意というより趣味でやっているんですけどね。はいこれです」

沙「おっ、これは凄いな」

羽「ご飯は五目だし、おかずも玉子焼きや唐揚げを筆頭に野菜などの料理も入れられてとても美味しそう……」

沙「こやつできる！」

鳴「こやつって……私っていったい……」

音「じゃあ次は羽々姫ちゃん行きましようか」

羽「私ですか」

沙「羽々姫って料理すると黒焦げにしちゃうキャラだったよな」

羽「違いますよ……とにかくこれです」

音「サンドイッチね。美味しそうね」

羽「音々先輩止めてくださいね。音々先輩だと本当に全部食べてしまいますから」

音「あら残念。……じゃあ次は沙々羅ね」

沙「あたしはこれだ」

鳴「これって……」

羽「どう見ても市販のパンですよね」

沙「ん？そうだが」

羽「いやこの流れで市販って可笑しいでしょ！ 弁当はないんですか？」

沙「ああ、あるぞ。はいこれ」

羽「あるなら最初から出してくださいよ……ってこれ全部焼きそば

じゃないですか！」

沙「そうだな。旨いぞ」

羽「いや確かに美味しいでしょうけど……よく炭水化物に炭水化物で食べれますね」

音「でも関西ってそういう食べ方するわよね」

鳴「沙々羅先輩って出身は静岡ですよね……？」

沙「難しいことは気にするなって」

羽「はあ、もういいです。ラスト、音々先輩お願いします……って見るからに大きいですね」

音「朝からがんばったもの。これくらい食べないとね」

鳴「見ているだけで吐きそうな量ですね」

音「ふふふ、ありがとう」

羽「いやそれ褒めてないですよ。……さて食べますかってあれ？私のお弁当は？」

沙「ああ、弁当ならあそこ」

羽「ぎゃああああ、私の弁当が猿に！　そういうことは気づいたら教えてくださいよー！」

沙「そんなこと言っている間に猿が行っちゃうぞ」

羽「わかってますよ！ 待ちやがれ、エテ公！」

「File#004」

ミッション・レポート 「File#004 5月某日 記録者

桜狩 沙々羅」

沙々羅「お風呂気持ち良かったな」

音々「そうね」

鳴々葉「はい、とても良かったです」

羽々姫「私は猿におちくられて散々でしたけどね……てかいんですか？ いくら格安のお宿って言っても泊まりなんて……」

沙「いいんだよ。これは必要最低限のコストということだ」

羽「沙々羅先輩がそういうのならいいですけどこれ誰が払うんですか？」

沙「妥当に割り勘でいいだろ」

羽「あれ？ 以外ですね。こういうのは後輩に押し付けるとばかり思っていたんですが」

音「それは沙々羅にボケて欲しかったのかしら？ それとも自分が全部払いたかったのかしら？」

羽「いえ、これで結構です」

鳴「あつ、部屋ってここですか？」

沙「ああ、ここだな。開けるぞ」

鳴「わあ、広いです」

羽「本当、広いですね。布団も敷いてますよ」

音「今日はゆっくり寝れそうね」

羽「本当こんな贅沢っていつ以来でしょうか」

沙「つておいおい。全員布団に入って寝ようとするなよ」

羽「えゝ、いつも寝てるくせになんで今日は起きようとするんですか……」

沙「やはりこういうところに来たからには夜は何か話すだろ……因数分解とか慣用表現とか」

羽「そこは恋話とかしましょうよ！」

音「じゃあ、羽々姫ちゃんは何か恋話あるのかしら？」

沙「自分でそういうこと言うなら何かあるんだろ？」

羽「あつ、罨に嵌めましたね！ そんなのないですよ。だって昔私はアイドルで恋愛できませんでした。今は……できるはずもないでしょ……。そういう先輩達や鳴々葉はなかったんですか？」

沙「あたしもずっと軍に勤めてきたからな。そんなのはなかったぜ」

音「私もそうね。体が弱かった時はそんなのできる状態ではなかったし、その後は軍にいたもの」

鳴「私もです。ずっとお父さんと修行していましたから……」

羽「……私達って女の子の話向いてませんね」

鳴「羽々姫ちゃんそれは言わないで……」

沙「じゃあ何話す？」

羽「やっぱりまだ話すんですか……と言っても私達は何も思いつかないですよ。元々寝ようと思ってましたし」

沙「そうだな……じゃあ怪談でもするか」

羽・鳴・音「えっ……」

沙「ん？ どうした？」

羽「どうしたじゃないですよ。忘れたんですか、『あの事件』」

沙「もちろん覚えてるぜ。だがあれは鳴々葉の恐怖心がMaxになった時だけだろ？ 引き金は一人ぼっちにしまったことが原因だしな……大丈夫じゃないか？」

羽「いえ、全然大丈夫じゃないと思います」

沙「じゃあどうするんだよ」

羽「そうですね……ってだから私達は寝ることを推進しているんだってば。てか話を作ろうにも作者が無知だからどれも作れないんじゃないですか？」

鳴「羽々姫ちゃんそういう発言は止めようよ……」

音「そういえば怪談話で思い出したけど、ここってそういう類の噂ってなかったかしら？」

羽「？　どんなのですか？」

沙「ああ確かにあったな。この宿屋には色々と怪奇現象が起こるという……」

鳴「ひっ」

羽「ちょっとそんなの今さら言わないでくださいよ……あっ、もしかしてここが激安なのは！」

沙「ああ、それが原因だと思っぞ」

羽「めちゃくちゃ最悪じゃないですか！」

鳴「うっ………何でこんなことに」

沙「……じゃあ寝るか」

羽・鳴「ええ!？」

羽「ちょっと何でこのタイミングで寝るんですか!」

沙「いや話してたらこっちも怖くなってきたな……」

羽「おバカー……!」

鳴「……音々先輩は大丈夫なんですか？」

音「私は信じてないからね」

鳴「そうでしたね……って!？」

羽「ちょ、何でこんなときに停電!？」

沙「怪異だ! お化けの仕業だ!」

鳴「うう……怖いよ……」

音「ちよつと足踏まないでよ」

羽「今背中触ったの誰ですか？」

沙「あたしは触ってないぞ」

鳴「私もです……」

音「私もね……」

羽「じゃあ今のつて……ぎゃあああ
」

鳴「いやあああ
」

音「きゃあああ
」

沙「うわあああ、今日は終わり！
」

「File#004」（後書き）

ルシフェル「どうもお久しぶりです！ 久しぶりの更新ですね」

羽「そう思うなら早く更新してくださいよ……てか最後あれ大丈夫だったんですか？」

ル「まあ大丈夫じゃね？ たぶん実際はブレイカーが落ちたため女将さんが来たとかだよwww」

羽「適當ですね……」

鳴「……あの何で今回は後書きまでこの形式なんですか？」

ル「だって前々回の更新で自分出れなくなったじゃん。だから今回は思ってたw」

羽「ええ……」

沙「まあいいじゃねえか。で次の更新は二カ月後か？」

ル「いや次は来月にしようと思うんだ」

音「あら、どうしてかしら？」

羽「あつ、そういえば来月は私達の……」

ル「そう！ サイハテが出るんだぜ！ ヒャッホー！！ テンション上がってきたー！」

鳴「本当嬉そうですね。でも私たちも嬉しいです」

沙「ここまで道のりは長かったもんな」

ル「だね〜。ということでは来月も更新します。てか二ヶ月に一回だと『この小説は（ry』ってやつが出るから一ヶ月に1更新するかもwww」

羽「計画性ないですね……てかもう片方の小説は停止するのにこっちは良いんですか？ 受験生で大事な時期だったのでは？」

ル「あゝこっちはしないよ。こっちは考えないでかけるから」

鳴「私たちの小説って……」

ル「まあネタ尽きたらやめるかもだけどwww」

沙「扱いひどいな……」

音「ふふふ、ちょっとやろつかしら？」

ル「いやいつからヤンデレになったんですか、音々さん。普通に怖いんです。まあとにかく次回もがんばりますんで！ では感想、評価、質問、誤字脱字等よろしくお願いします」

全員「お願いします！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7734w/>

サイハテの聖衣の日々（ミッション・レポートより）

2011年11月10日13時04分発行